

---

## 4の中にトラ模様の5。

毛玉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

4の中にトラ模様の5。

### 【Nコード】

N6729Z

### 【作者名】

毛玉

### 【あらすじ】

悲劇の聖杯戦争を喜劇に。でも明日が見えない、それが虎結界。第四次聖杯戦争に虎聖杯をミックスしてみよう！

\*これは作者の妄想によるお話です。本気にしないでください。

## 予告（前書き）

はじめまして、毛玉です。

文章書くのが初心者な上に、Fateシリーズ全てうる覚えとい  
かなり悲しい脳みその持ち主です。

予告はとりあえずセリフだけです。

それでも大丈夫な方はどうぞ（ダメな人は急いでバック！）

## 予告

終わった。

その日、偶然か必然か同じ時に同じものを求めた者たちは悟った。

聖杯のくなんちゃら以下省略。

そんな呪文を言って、それぞれが覚悟の上で挑んだものは微塵もなく砕かれた。

く毎度おなじみ聖杯戦争、開幕編く

「呼ばれて飛び出て、歩いてきたわ！ カレイドルビーここに爆誕  
！！」

「その道連れアーチャー惨状（誤字にあらず）」

「・・・終わりだ綺礼。この戦い、もう無理だ」

優雅、なにそれおいしいの。

「やつちやえバーサーカー！」

「了解致しました、お嬢様。我が身に変えても！」

「ぐはあ！・・・え、無理。これ無理」

血を吐いて瀕死状態。きつと彼のステータスは幸運Dクラス。

「くすくすごーごー。目指せ真ヒロインルート！！！」

「ひいひい！ 桜、くろ、黒い触手がー！」

「ラスボス降臨！？」

魂が抜かれた。

そこだけ原作通りになりそうなヒロイン・ウェイバーちゃん。

「ああああ、渾身の肉じゃがが、宗一郎様の昼食が！」

「気にするなキャスター」

「すげえ、青紫！それ毒薬でしょ！」  
龍之介終了のお知らせ。

「むーむーむー！」

「うるさいわよ、駄犬が」

「カレン！ランサーを離しなさい！」

「こ、これが日本の伝統昼ドラね！」

「そうか、これが昼ドラか・・・」

ソラウ、ケイネス異文化を学習。

「アサシンや、お昼ごはんはまだかのお？」

「魔術師殿、お昼は先程済ませたじゃないですか」

「おうおう、そうか。では朝食はいつになるかのお？」

「・・・食つか？」

そつと麻婆豆腐を差し出す神父。第一級死亡フラグがここにはあった。

「私のマスターならば、この三倍の食事をもってこい！」

「セイバー、おかわりならもうないぞ」

「そ、そんな!？」

「切嗣、とりあえずお料理したほうがいいのかしら？」

「待つんだアイリ、そんな（悲劇メシマズ）ことをしなくていい」

## 予告（後書き）

第五次メンバーはお昼時に呼ばれたようです。

## 序章（前書き）

ゆっくり投稿。ようやく序章です。

実は虎聖杯っていうかゲームをした事無いのでよく知らない。

でもいいよね？これは妄想です。って三回唱えて暗示ができた人は

GO



「「「「「いただきます」「」「」「」

習慣になつてい挨拶をし、食事に手をのばす。

「もぐもぐ・・・、このタレがなんとも言えず」

「うう、またレベルが上がってます。先輩この味付けって・・・」

「ああ、それならーだぞ」

「士郎ってほんと和食はおいしいわよねー」

「シロウ、いつでも私のメイドになつていいいからね？」

「メイドって、なんでさ。せめて執事がいいぞ」

「下僕に成り下がりたいなんて、では教会の掃除を・・・」

「いや別に下僕になりたいわけでは、つて昨日ランサー掃除してな

かったか？」

「士郎くん、後で面接の練習をお願いしていいでしょうか？」

「あんだ、また落ちたのか」

ワイワイ、キャツキャ。衛宮邸は今日も平和です。

完

「つて、くおらああああ！！！！」

バーン！そんな音と共に障子を吹き飛ばし虎は吠えた。

「なーにが 完。つよ！ 例え真つ赤なお月様が落ちてこよう

ともお姉ちゃんはその様な終わりは許さないだから！！」

「藤ねえ、食事時に行儀が悪いぞ。ほら茶碗、ご飯はこれくらいで

いいだろう？」

「わーい、ツヤツヤの米が噛み締めることに甘みを増すわー。味噌

汁と味のハーモニー！つてちつがーう！ご飯ごときでおねいちゃん

を懐柔しようなんて甘い！」

「でも、藤村先生しっかり食べるのね」

「席にもちやつかりついてますしね」

うっかり遺伝子を内包する姉妹は息ぴつたり大河の行動を口にした。

「だってー、士郎のご飯を食べないなんて勿体無いじゃないのよう。お残し厳禁、食事が回れば世も回る。食事は真理です」

キリツと告げる大河、その頬には米粒が付いている。

「藤ねえ・・・」

「いえ、士郎。大河の言い分は正しい。食事はなくてはならないものです、美味しければ美味しいほどに、・・・人は満たされる」  
ほうつと息をつき、威厳に満ち溢れながら食卓の王は微笑んだ。

「ええ、よって士郎おかわりを」

「・・・はい」

ナゼダロウ、シヨツパイミズガナガレソウダ。

「あーもう、士郎のせいで話が脱線しちゃったじゃない」

ガツガツとハイスピードで食事を食らった大河はお茶をぐいっと飲みながら言った。

「あー、藤ねえ。虎聖杯なら要りません。うちは間に合ってます」

「何よー、みんなしてスルーして。聖杯戦争しなきゃ物語は始まらないのよー」

「・・・だつてなあ。毎回ろくでもない結果しか生まないじゃないか？ そんなもの誰も欲しがらないって、いい加減みんな懲りたつて。なあみんなもそう思うだろ？」

「ええ。・・・ナイチチ、マジヨッコ」ボソツ。

「はい。・・・ハーレム」ボソツ。

「そうね。・・・紳士バーサーカーなんて嫌」ボソツ。

一部黒歴史を思い出したのか沈んだ顔をしているが、みんなが意見を同じにした。

「・・・うわーん！ なによ、なによそんなに聖杯なんていらなんて・・・。あ！」

ぴーんと猫の目になった大河。

「藤ねえ？」

良からぬことを考えつきました言わんばかりのその目に、士郎が阻止しようとする声をかける。

しかし、大河はさつと立ち上がりニンマリと笑い宣言した。

「そうよー、欲しがっている人がいるならそっちに行けばいいのよね！」

「は？ いや、誰もほしがってないからこういう事になってるんだろ」

「ふふん。聖杯戦争が始まらないなら、始めて見せよう虎聖杯！

じゃあそついうわけでいつてらっしやーい！！」

そう大河が入った途端、全員の足元が光った。

それは見覚えのあるもので。ぶっちゃんけサーヴァント召喚陣だった。

「なんでさー！」

## 序章（後書き）

キャラクターの口調がわからないorz  
藤ねえ、あなたがいると話がつるっといろんな方向に滑って纏まら  
ない。

序章でしんどいわ

外道マ―坊：説明編（前書き）

これは毛玉的、脳内まとめです

## 外道マー坊：説明編

バットエンド、それは蜜の味。

外道マー坊道場

マー坊師匠「レディースアンドジャントルメン！用意はいいか、これは設定が行き当たりばつたりの作者のための適当なルール説明だ！」

戯留弟子「哀れすぎて同情する価値もない雑種のために救いの手を！」

マー坊「一つめ、マスターは第四次メンバーの令呪持ち」

戯留「つまり、五次のマスター共はマスターではないということか？」

マー坊「そうだ。では五次マスターはなぜいるのかというと、彼らは聖杯の運び手ならぬ掴み手だ」

戯留「うん？掴み手とはどういうことだ、マー坊よ」

マー坊「今回の大聖杯にはアンリはおらん。代りに虎聖杯が詰まっている。それを掴みとれるのは五次マスターたちだけだ。という設定だ」

戯留「ふむ、行き当たりばつたり感のあふれる設定だな。書きだしから五次マスターいる理由がねえとでも思ったのだろうな！」

マー坊「そうだな。ぶつちやけなんているの？とかまで思ったらしい」

戯留「見るに耐え難い道化だな！」

マー坊「作者の粗探しはそこまでにして・・・」

戯留「ふむ。終わりがいいからな！では次のルールだ！」

マー坊「2つ目、死人ダメ絶対！令呪で自害禁止。マスター、運び

手、サーヴァント死ぬのは禁止。ではどう勝敗を決めるのかという  
と」

戯留「たわけた作者はみんなが幸せになどという破綻した夢を応援  
したい派らしい。くだらん！」

マー坊「いいではないか、失敗した時の失意はより深みを増す」

戯留「所詮道化ということか！ 脱落は気絶、降参、犯罪行為が見  
つかった場合。となる脱落はマスター、サーヴァント、運び手の誰  
かひとりでもした場合運命共同体だ」

戯留「ちなみに犯罪行為はバレなきゃいいらしい」

マー坊「バレなければいいのか？」

戯留「・・・何をしている？」

マー坊「衛宮の盗s a t・・・」

戯留「節度を持って行動しろということだ！」

マー坊「ちなみに令呪でどの程度まで命令できるかといったら、基  
本面白おかしいものはできる。つまらない命令も適度に面白くなる。  
・・・令呪に命ずる。戯留、麻婆豆腐を食べる」

戯留「きさまあ！！ ががががぎ！ K A R A I Y O！」

マー坊「これは面白いと判断されるのか」

子戯留「えー、マー坊によって大きい僕が旅立ったので僕が変わり  
ます。うんと、これはルールと言うかできることですね。

五次マスター・聖杯の運び手は戦闘に参加できる。これはサーヴァ  
ントのように戦うという意味でなく、実力的にはマスターとして戦  
闘に参加できるというだけで、戦闘能力が上がるわけでも令呪が使  
えるわけでもないの。ぶっちゃけ彼らが脱落したらその時点で負  
けなんでリスクが結構ありますね」

マー坊「・・・」

子戯留「あれ？どうしたんですか？」

マー坊「いや、降参という負け判定があるのだからな、なかなかい

い勝負をするような気がしてな」

子戯留「ああ、そうですねー」

マー坊「・・・さて、以上が作者の中の最低基本ルールらしい。先が見えないどころか、瞼を開けていないような作者なので期待しないで待っていて欲しい」

マー坊・子戯留・作者「では、次回また会いましょう」

外道マナー坊：説明編（後書き）

きつと変更するにじつにじつぱいおるやー！

## 1 (前書き)

なにこれー。

勢いで書いて勢いで終わる。

セイバーは混乱していた。

見覚えのある景色、見覚えのある人物。

景色はアインツベルンの城、人物は衛宮切嗣とアイリスフィール。

「わ、私のマスターならば、この三倍の（美味しさの士郎の）食事をもつてこい！」

だから思わず本能で行動した。腹ペコ王の本領発揮である。

そして士郎も混乱していた。

見知らぬ景色、だが見知った身内。どこか見知った面影のある知らない人。

特に二番目、衛宮切嗣を見て混乱していた。

だから思わず日常的な行動（家事）をして落ち着こうとした。

しかし、しゃもじはあれどお櫃はない事に気づき。

「セイバー、おかわりならもうないぞ」

そんなことを狼狽えながら言った。

「そ、そんな！？」

そしてシヨックを受ける腹ペコ王。

「……………」

どうしていいのか、黙りこむ二人。

そんな二人に対して、状況を打破しようとしてか、アイリスフィールは信頼できる夫に尋ねた。

「切嗣、とりあえずお料理したほうがいいのかしら？」

しかし彼女はズレていた。

「待つんだアイリ、そんな（悲劇メシマズ）ことをしなくていい」

そして、反射的に彼女を引き止める切嗣。彼もまた混乱していたのだろう。

けれど彼の行動は尊かった。このまま彼女が料理をしたら起きるのは悲劇のみだった。

彼は間違いなく正義の味方だった。

数十分後。

セイバー、士郎と切嗣、アイリスフィールはテーブルを挟んでお茶を飲んでいた。

正確にはセイバー一人がお茶とそれについてきた菓子を食べていた。「ええと、それで君は僕の養子で、イリヤとも姉弟で・・・そして、聖杯は歪んでいると」

切嗣は士郎がいつぱいいつぱいになりながら告げた情報をまとめ口に出す。

最も重要な聖杯について苦み走った顔を隠しもせずには彼は事実を認める。

「ああ。多分じいさん。あ、ええと切嗣さん？やアイリスフィールさんの願いは・・・微妙だと思う」

「士郎くん。アイリって読んでいいわよ。あ、でもお母さんでもいいわ」

キラキラつと笑顔でアイリがお母さん呼びを提案する。

「え！？ や、そのアイリさんって呼びます！」

ワタワタと照れくささもあってそう叫ぶように言う士郎を眺めながら切嗣は頭を抱えた。

「・・・頭が痛い」

「ですが、事実です」

そんな切嗣の言葉にセイバーが人心地をつけ、お茶を飲みながら返す。

「・・・・・・・・」

「あなたはどこでも、あなたに変わりないのですね」

出会って一日も立たないのにこの二人はすでに仲が悪くなっていた。

ちなみに切嗣とアイリが妙に事実を受け入れているのは、ひとえに師匠が降臨したからである。

固有結界タイガー道場を展開して、あれやこれやで切嗣とアイリを

謎のテンションで包み『ワシ・ホカニ・セツメイ・イク』と叫び嵐のように去っていった。

そのときに出てきたロリっ子ブルマを、二人はたとえ地獄に墮ちても忘れない。

などと強烈すぎて心の片隅で思ったりなんかした。

「あ、でも切嗣、さん」

「呼びずらければじいさんでもいいよ？ 士郎くん」

「あーごめん、そんな年じゃないってのはわかってるんだけどさ。

俺も呼び捨てでいいよ」

「そうかい？ じゃあそう呼ばせてもらうよ」

「ズルイわ切嗣。 士郎、お母さんって呼んで！」

「ええー！」

はははとほのぼのとした空気が流れた。

そんな空気の中で、たたたと軽い足音が近づいて来た。

この城の中で、この足音はただ一人のためみんながドアを見つめる。

「トペっ、アインツベルン！！」

「うわ、イリヤそれは禁止だって」

「あらあら、お転婆ねイリヤってば」

アイリが開いたドアの向こうから、士郎に飛び込んできたイリヤに微笑む。

このイリヤは未来からのではなく現在のイリヤである。

「イリヤ、御当主はどうだい？」

「うーん、おじい様。 お昼はまだかって聞いて、済んだでしょーっ

て行ったらじゃあ朝餉はまだかーって言ってたわ、ボケたみたい」

「・・・そうか」

飛び込んできたイリヤに切嗣が尋ね、イリヤは先程まで看護していたおじい様について子供ながらに純粹な瞳で告げた。

アインツベルン、執念深い一族の長がこのほのぼの空間に何もしてこないのも理由があった。

看護といったように、当主は一人では危ないただの爺さんに成り下

がっていたからだ。

切嗣は遠い、遠すぎるどこかを死んだ目を濁らせて見つめた。

それは混乱する召喚の場で、更に混乱を引き起こしたタイガー道場が展開されてからすぐのことだった。

「おwんclkdあls、あ、xcこじんkおうwwつw!？」

謎の奇声を上げて、当主はピクピクと虫の息であった。

召喚の様子を確認してきたのか、当主自ら足を運んだその場には、アインツベルンの歴史をステンドグラスに写してあった。

そう、「あつた」。過去形である。

タイミング良く、悪く？

タイガー道場に一緒に巻き込まれた当主。呆然としたまま現実に戻ってきた彼は、そこでまたもや悪夢を見た。

ステンドグラスは、全てトラ柄になり、そこにあったのは虎の歴史であった。

虎が吠える、虎が食う、虎が眠る。

そして三匹の虎がトラ柄の魔法瓶を囲んでいるものになっていた。当主の心は立ち直れないほどに折れた。以降彼は孫を愛する徘徊爺に成り下がったのである。

困ったのは切嗣たちである。

聖杯絶対入手と言っていた老人は、孫が可愛くて幸せです。聖杯？おじいちゃんは何でも好きなモノあげるよーイリヤは聖杯欲しいかい？ ううん、べつにー。そうか、そうか。じゃどうでもいいんじゃないか？

というふうになってしまった。

「・・・どうしたものかな？」

切嗣はアインツベルンに雇われている。また自分の願いもある。

当主が乱心したからといって、切嗣の願いまでもなかったことにするには踏ん切りがつかない。

しかし・・・。

「あ、聖杯か？」

「うん、聖杯は願いを正しく叶えないんだよね？」

そんな切嗣の悩みを士郎が当てる。

「ああ、俺たちの世界の第四次聖杯戦争は破綻していたけど、今回は大聖杯の中に虎聖杯が埋まってるらしいから。正しく叶えないだけで、面白おかしくは叶えてくれる」

「・・・面白おかしくか」

「ああ、面白おかしくだ」

士郎の大真面目な返答に、すでに体験したタイガー道場のこともあり困った顔をする切嗣。

けれど、そこでアイリから一つ疑問が出た。

「ねえ、士郎、セイバー。面白おかしくって具体的にはどうなるのかしら？」

「そうですねアイリスフィール。まず確実なのはトラ柄でしょう」  
アイリの疑問にセイバーが丁寧に答える。

「トラ柄？」

「ええ、大河は聖杯戦争が始まらないならば始めようと言っていたので、そこまで中身が歪むことはないと思います。なので外見が歪む可能性が高いかと」

「じゃあ机が欲しいって言ったらトラ柄の机が入ったりするのかしら？」

「そうじゃないでしょうか？」

「・・・そう、切嗣」

そこまでセイバーと話して、アイリは切嗣に真剣に向かい合った。

「なんだい、アイリ？」

「切嗣の願いは、誰も泣かなくていい世界。そうよね？」

「・・・ああ」

「切嗣、私は幸せだわ」

そう、心から彼女は言った。

なぜなら、本来の戦争で彼女が最後までいる結末は限りなく零だと、

最初から知っていたから。

「だけど、この戦争はすでに破綻している。」

「当主はボケて、未来から結末を知っている息子にサーヴァントが来て。」

正直、これ以上ないってほど魔術師の『アインツベルン』としては最低な聖杯戦争だと思う。

でも、それでも彼女は笑う。

アインツベルンではなく一人の女として妻として母として。

「貴女がいて、イリヤがいて、士郎がいて、セイバーがいる。聖杯戦争は確かに始まったけど、本来失うはずの私たちは、失わないで進める道ができたのだから幸せだわ。だから、切嗣。一緒に聖杯を掴みにいきましよう。大切なのは中身だし、ダメならダメで新婚旅行だと思えばいいのよ！ 何があっても、どこにだって行くわ、だって私はあなたの妻なんだから」

毅然と彼女は言った。

「・・・ああ、そうか」

彼は思った。

妻の美しい顔に浮かぶ決意と、いつか誰かに言おうとしていた。大切な人に告げようとした言葉、その誇らしさを思い出した。

「アイリ、僕はね正義の味方になりたいんだ。一緒に来てくれるかい」

「当然よ」

「につこりと微笑む妻に、誇らしげに告げる夫。」

「ねえ、士郎、セイバー？」

「なんだイリヤ」

「私たち空気ね」

「・・・」

1 (後書き)

アイリさんの女魂、魅せつけてやれ。夫婦以外空気。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6729z/>

---

4の中にトラ模様の5。

2011年12月26日00時50分発行